

稲部遺跡

第37次発掘調査報告書

—分譲住宅建設工事に伴う発掘調査—

令和6年3月

彦根市

稲部遺跡

第37次発掘調査報告書

—分譲住宅建設工事に伴う発掘調査—

令和6年3月

彦根市



1 SD01 全景(北から)



2 SD01 3トレンチ土層断面(南壁)

例 言

1. 本書は、彦根市歴史まちづくり部文化財課（令和5年4月～ 観光文化戦略部文化財課）が、分譲住宅建設工事に伴い、令和4年11月22日から令和4年12月22日にかけて実施した、稲部遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
整理調査については、令和5年4月18日から令和6年3月にかけて行った。
2. 本調査の調査地は、彦根市稲部町字ヨコクテ108番6に位置する。
3. 本調査は、彦根市歴史まちづくり部文化財課が実施し、整理作業については彦根市観光文化戦略部文化財課が実施した。調査の体制は下記のとおりである。

令和4年度（現地調査）

彦根市長：和田裕行

歴史まちづくり部長：久保達彦

歴史まちづくり部次長：古川雅之

歴史まちづくり部副参事兼文化財課長：井伊岳夫

文化財課長補佐兼管理係長：西崎和則

文化財係長：林昭男

主査：戸塚洋輔

主査：田中良輔

技師：内藤京

技師：川村峻太

会計年度任用職員：宮崎幹也

会計年度任用職員：樋口杏奈

会計年度任用職員：沖田陽一

会計年度任用職員：久保亮二

会計年度任用職員：小野直子

会計年度任用職員：岡田ひとみ

会計年度任用職員：春名英行

令和5年度（整理調査・報告書刊行）

彦根市長：和田裕行

観光文化戦略部長：久保達彦

観光文化戦略部次長：山岸将郎

観光文化戦略部副参事兼文化財課長：井伊岳夫

文化財課長補佐兼管理係長：西崎和則

副主幹兼文化財係長：林昭男

副主幹：戸塚洋輔

副主幹：田中良輔

主任：内藤京

技師：川村峻太

会計年度任用職員：宮崎幹也

会計年度任用職員：樋口杏奈

会計年度任用職員：久保亮二

会計年度任用職員：小野直子

会計年度任用職員：岡田ひとみ

会計年度任用職員：春名英行

会計年度任用職員：佐藤利江

4. 現地調査と整理調査は川村が担当し、以下の諸氏が参加した。
現地調査：沖田陽一（調査補助員）、久保亮二（調査補助員）、戸塚
公益社団法人彦根市シルバー人材センター
整理調査：樋口杏奈（調査補助員）、久保亮二（調査補助員）、小野直子（調査補助員）、
岡田ひとみ（調査補助員）、春名英行（調査補助員）、佐藤利江（調査補助員）
公益社団法人彦根市シルバー人材センター

5. 本書で使用した遺構実測図は、久保、沖田、戸塚が作成し、遺物実測図については、樋口、岡田、春名、佐藤が作成した。遺構と遺物の写真撮影は、戸塚、川村が行った。
6. 現地調査および本書の作成にあたり、稲部遺跡群調査検討委員会の先生方から指導・助言・協力を得た。ご芳名を記して感謝の意を表する。
森岡秀人 若林邦彦
7. 本書の執筆は、第3章 第2節は戸塚が行い、その他の執筆・編集は川村が行った。
8. 本書で使用した方位は、真北に、高さは東京湾平均海面に基づく。
9. 本書で報告する土器の断面と種類の関係は、以下のとおりである。
土師器 須恵器
11. 本調査で出土した遺物や写真・図面等は彦根市観光文化戦略部文化財課で保管している。

目 次

巻頭図版

例言

第1章 序 論

1 調査経緯	1
2 調査の方法と経過	5
3 地理的・歴史的環境	6
(1) 地理的環境	6
(2) 歴史的環境	11

第2章 調査成果

1 基本層位	17
2 遺構と遺物	19
(1) SD01 大溝	19
(2) 出土遺物	20
(3) 小 結	29

第3章 総 括

1 主な調査成果 大溝SD01について	30
(1) はじめに	30
(2) 出土土器の時期	30
(3) 大溝の時期	30
2 稲部遺跡群北大溝について	31
(1) はじめに	31
(2) 14次・37次調査の大溝	31
(3) 大溝に関する課題	33

出土遺物観察表

図版

報告書抄録

図版目次

巻頭図版

- 1 1 SD01 全景 (北から)
2 SD01 3トレンチ土層断面 (南壁)

図版

- 1 1 調査区全景 (南から)
2 調査区全景 (北から)
2 1 SD01 3トレンチ土層断面 (南壁)
2 SD01 3トレンチ土層断面 (南壁)
3 1 SD01 1トレンチ土層断面 (北壁)
2 SD01 1トレンチ全景
4 1 SD01 土器出土状況
(1トレンチ下層)
2 SD01 土器出土状況
(1トレンチ上層)
5 1 SD01 木製品出土状況
(2トレンチ下層)
2 SD01 遺物出土状況
(3トレンチ窪地堆積層)
6 1 SD01 下層出土木製品
2 SD01 下層出土木製品 (部分写真)
3 SD01 窪地堆積層出土木製品
4 SD01 窪地堆積層出土木製品
(部分写真)
7 1 SD01 出土土器
2 SD01 出土土器 (部分写真)
8 SD01 出土土器
9 1 SD01 下層出土土器
2 SD01 窪地堆積層 出土土器
(蔽き石)
10 1 SD01 窪地堆積層 出土土器
2 SD01 窪地堆積層 出土土器
(部分写真)

図表目次

挿 図

- 第1図 稲部遺跡の位置 ————— 1
第2図 稲部遺跡群調査区位置図 ——— 2
第3図 SD01大溝の調査状況1 ——— 5
第4図 SD01大溝の調査状況2 ——— 5
第5図 稲部遺跡周辺の遺跡 ————— 7
第6図 調査区位置図 ————— 17
第7図 調査区全体図・壁面およびトレンチ
土層断面図 ————— 18
第8図 SD01遺物出土状況図
(上層・下層) ————— 21
第9図 SD01上層・下層出土土器 ——— 22
第10図 SD01下層出土木製品 ——— 23
第11図 遺物出土状況図 (窪地) ——— 24
第12図 窪地出土土器・石器 ——— 25
第13図 窪地出土石器(1) ————— 26
第14図 窪地出土石器(2) ————— 27
第15図 窪地出土木製品 ————— 28
第16図 稲部遺跡14次SD01・
37次SD01の検出面高・底面高—— 32
第17図 稲部遺跡14次SD01・
37次SD01土層断面図 ————— 32
第18図 稲部遺跡群における庄内式期から
布留式期初頭の北大溝の位置—— 33

挿 表

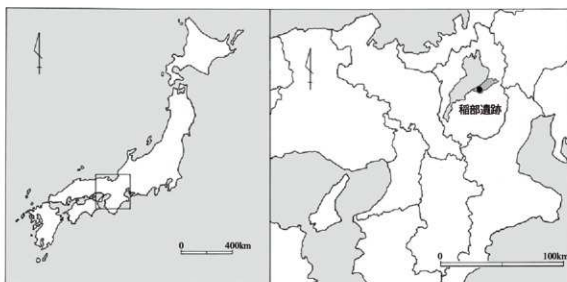
- 第1表 稲部遺跡群調査一覧 ————— 3
第2表 周辺遺跡一覧 ————— 8
第3表 稲部遺跡14次SD01・
37次SD01の規模・層位・時期比較 — 32
第4表 出土遺物観察表 ————— 35

第1章 序 論

1 調査経緯

稲部遺跡は、彦根市稲部町および彦富町に所在する周知の埋蔵文化財包蔵地である。かつて1981年（昭和56）には、稲枝東小学校の南東側において宅地造成工事に伴う第1次調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代前期を主体とした土器が出土し、当該期の集落が周辺に存在している可能性が指摘されていた。その後、長らく調査が行われない期間が続いたが、2013年（平成25）から市道改良工事に先立ち第2次調査が行われ、弥生時代終末から古墳時代前期初頭の集落の一画の状況が明らかとなった。その後も市道改良工事に先立ち2014年（平成26）から2016年（平成28）にかけて、第3次・第6次・第7次調査が実施された。また、隣接する周知の遺跡として稲部西遺跡と彦富南遺跡が存在するが、各遺跡との明確な区分はなく、特に稲部遺跡と稲部西遺跡については、2013年（平成25）から2016年（平成28）に市道改良工事に先立って行われた稲部西遺跡第1次・第2次調査によって、ほぼ同時期の遺構が両遺跡にまたがっていることが確認され、同一の遺跡群として把握できることが明らかとなった。その後も、第40次以上におよぶ調査が行われ、竪穴建物、周溝付建物、掘立柱建物からなる集落遺跡であることや、金属器生産関連遺構・遺物も確認され、湖東地域における弥生時代後期から古墳時代前期の拠点集落としての性格が明らかになってきている。

こうした中、2022年（令和4）9月9日に彦根市稲部町字ヨココテ108番6において、分譲住宅建設工事に先立ち、工事主体者である一建設株式会社から文化財保護法第93条の発掘届及び発掘調査依頼が提出された。そのため、同年10月4日に敷地面積147.47㎡を対象にトレンチ1ヶ所を設定して試掘調査を実施した。調査の結果、溝が検出され、溝には弥生時代終末から古墳時代初頭と推定される土器が出土した。試掘調査結果をもとに、遺構検出面の標高値と住宅建設



第1図 稲部遺跡の位置



第2図 稲部遺跡群調査区位置図

第1表 稲部遺跡群(稲部遺跡・稲部西遺跡)調査一覧

調査年度	調査期間	調査地	調査範囲	調査面積 (㎡)	主要遺構	主要遺物	調査意義
1次	昭和47年 (1982) 2月19日 ～3月19日	稲部第164番	芝穂遺構	500	弥生後葉～古墳中期、自然沈積土層定石を中心とした遺構	弥生後葉中葉～古墳前期の上層、縄文土器、縄文土器土、弥生土器	遺跡北西端において自然沈積土層と弥生土層の接合部を調査する
2次	平成22年 (2012) 2月24日 ～平成25年 (2014) 3月27日	稲部第134番、435番	中道平塚倉庫跡 稲部北作庫	790.43	縄文後葉～弥生後葉期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、独立柱状建物 土器・古墳前期の土器、弥生土器、古墳前期の土器、弥生土器、弥生土器 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期	縄文後葉期・縄文後葉期の上層、弥生土器・古墳前期の上層、弥生土器・古墳前期の上層、弥生土器・古墳前期の上層、弥生土器・古墳前期の上層、弥生土器・古墳前期の上層、弥生土器・古墳前期の上層	遺跡北西端の遺構、中道平塚倉庫跡、稲部北作庫の調査
稲部西1次	平成25年 (2015) 6月12日 ～平成26年 (2016) 3月27日	稲部第144番、429番、 431番、432番	中道平塚倉庫跡	1,499.54	弥生後葉中葉～弥生前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	縄文後葉期・古墳初期の上層、弥生土器・古墳前期の上層、弥生土器・古墳前期の上層、弥生土器・古墳前期の上層	遺跡西側の居住遺構の調査、弥生土器・古墳前期の調査
稲部西2次	平成26年 (2016) 7月23日 ～平成27年 (2016) 12月27日	稲部第144番、435番 436番	中道平塚倉庫跡	600	弥生後葉期後半～古墳前期、自然沈積	弥生後葉期後半～古墳前期の上層	遺跡北西端の調査
3次	平成26年 (2016) 2月24日 ～平成27年 (2016) 3月27日	稲部第144番、445番、 443番	中道平塚倉庫跡	1,836.90	縄文後葉期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	縄文後葉期・上層、弥生土器・古墳前期、弥生土器・古墳前期、弥生土器・古墳前期	遺跡北西端の居住遺構の調査、中道平塚倉庫跡の調査
4次	平成26年 (2016) 11月21日 ～平成27年 (2016) 12月27日	稲部第189番4	個人住宅	102	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期・土	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期・土	居住地の調査
5次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
6次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
7次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
8次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
9次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
10次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
11次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
12次	平成27年 (2016) 6月23日 ～平成27年 (2016) 9月22日	稲部第189番19	個人住宅	64.55	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 遺石のみ、自然沈積	弥生時代前半～古墳時代後葉期、 弥生土器・古墳前期	居住地の調査
13次	平成28年7月10日 ～平成29年1月10日	稲部第130番4	個人住宅	133	弥生後葉期後半～古墳前期、大塚古墳群 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期	遺跡北西端の大塚古墳群の調査、弥生土器・古墳前期の調査
14次	平成28年7月10日 ～平成29年1月10日	稲部第130番4	個人住宅	133	弥生後葉期後半～古墳前期、大塚古墳群 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期	遺跡北西端の大塚古墳群の調査、弥生土器・古墳前期の調査
15次	平成28年7月10日 ～平成29年1月10日	稲部第130番4	個人住宅	133	弥生後葉期後半～古墳前期、大塚古墳群 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期	遺跡北西端の大塚古墳群の調査、弥生土器・古墳前期の調査
16次	平成28年7月10日 ～平成29年1月10日	稲部第130番4	個人住宅	133	弥生後葉期後半～古墳前期、大塚古墳群 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期	遺跡北西端の大塚古墳群の調査、弥生土器・古墳前期の調査
17次	平成28年7月10日 ～平成29年1月10日	稲部第130番4	個人住宅	133	弥生後葉期後半～古墳前期、大塚古墳群 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期	遺跡北西端の大塚古墳群の調査、弥生土器・古墳前期の調査
18次	平成29年2月7日 ～平成29年3月1日	稲部第130番4	分譲住宅	12	弥生後葉期後半～古墳前期、大塚古墳群 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期 弥生土器・古墳前期、弥生後葉期	弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期、弥生後葉期後半～古墳前期	遺跡北西端の大塚古墳群の調査、弥生土器・古墳前期の調査
19次	平成29年7月10日 ～平成30年1月10日 ～平成30年2月10日 ～平成30年3月1日 ～平成30年3月1日 ～平成30年3月1日	稲部第141番4(1ト ン)、141番5(1ト ン)、141番6(1ト ン)、141番7(1ト ン)	稲部西2次	298 (1～3ト ン)、138 (1ト ン)	土坑・土穴	縄文時代後葉期・縄文土器、弥生後葉期の上層	縄文時代後葉期・縄文土器、弥生後葉期の上層の調査

調査年度	調査時期	調査地	調査項目	調査面積 (㎡)	主要遺構	主要遺物	調査成果
19次	令和5年9月27日 ～令和6年2月 17日	稲垣町29番1、297、 298番1、299、 299番1	宅跡遺構	331.92	土溝・溝並、竪石柱建物・柱石	弥生時代～古墳時代前期の土器 (甕形透穴土器類)、ガラス 瓦丸、銅鏡、鉄	江戸内川の集落の大塚と 集落跡の調査。調査地 から北内川の集落と関わり のある遺構と土器類が、 ガラス瓦丸・銅鏡が出土し、 弥生時代集落の存在が 確認された。
20次	令和6年7月18日 ～8月22日	稲垣町27番8	個人住宅	19	土溝あるいは土溝	弥生時代前期～終末の土器	大塚に近い土溝帯検出。 調査地が北内川の集落と 関わりのある集落の存在 が確認された。
21次	令和6年9月21日 ～9月28日	稲垣町29番43	個人住宅	22	土溝・柱穴	弥生時代終末～古墳時代前期の 土器	併存地帯の存在が確認さ れた。調査地が北内川 である。古墳調査のみ調査 された。
22次	令和6年7月19日 ～8月11日	稲垣町27番8	個人住宅	49.93	土溝・土溝	弥生時代前期～古墳時代前期の 土器(一長形の古い土器)	大塚帯集落存在土器類の 調査のみ調査された。
23次	令和6年9月7日 ～8日	稲垣町31番1	個人住宅	18	なし	なし	弥生時代～古墳時代前期 の集落跡の調査と土器類 の調査のみ調査された。
24次	令和6年7月3日 ～9月1日	稲垣町1番の一帯	個人住宅	71.23	竪石柱建物の一帯とみられる構 造物(土溝・溝・土溝)	弥生時代～古墳時代前期(一部一帯 古墳時代後期の遺構) 土器	稲垣町集落の存在が確認 された。調査地が北内川 である。調査地が北内川の 集落と関わりのある集落 の存在が確認された。
25次	平成29年11月1日 ～平成31年12月 28日	稲垣町9番1、643番 2、644番	竪堀跡	436.37(沢田遺跡区 土庫)	弥生前期後半～終末、弥生建物 弥生終末～古墳前期、古墳後 期、古墳中期、古墳後、古墳 終末	縄文時代、縄文時代前期の土器 弥生終末～古墳前期、古内期の 土器	古内期区、大塚遺跡、金 銭類出土区間遺構の調査 のみ調査された。
26次	令和6年7月27日 ～10月9日	稲垣町9番1、643番 2、644番	竪堀跡	436.37(沢田遺跡区 と兼用)	弥生前期後半～終末、弥生建物 弥生終末～古墳前期、弥生建 物、古墳中期、古墳後、古墳 終末	縄文時代、縄文時代前期の土器 弥生終末～古墳前期、古内期 の土器	古内期区、大塚遺跡、金 銭類出土区間遺構の調査 のみ調査された。
27次	令和6年7月27日 ～7月27日	稲垣町29番1、297、 298番1、299、 299番1	宅跡遺構	165	弥生時代終末～古墳時代前期 の土器、土溝	弥生終末～古墳前期、古内期 の土器	19世紀調査から確認。本 調査より調査地が出土し、 弥生時代集落の存在が 確認された。
28次	令和6年7月28日 ～8月28日	稲垣町14番の一帯、 稲垣町14番一帯	弥生時代終末～古墳時代前期 の土器	200	弥生時代終末～古墳時代前期 の土器	弥生時代終末～古墳時代前期 の土器	併存地の集落跡の調査 のみ調査された。
29次	令和6年9月18日 ～21日	稲垣町31番27	個人住宅	6	なし	なし	集落跡の調査のみ調査 された。
30次	令和6年9月18日 ～21日	稲垣町31番10	個人住宅	48	大塚あるいは土溝	なし	集落跡の調査のみ調査 された。
31次	令和6年10月19日 ～令和6年12月 28日	稲垣町5番1、643番2、 644番	竪堀跡	436.37	弥生前期後半～終末、弥生建物 弥生終末～古墳前期、古墳後 期、古墳中期、古墳後、古墳 終末	縄文時代、縄文時代前期の土器 弥生終末～古墳前期、古内期 の土器	古内期区、大塚遺跡、金 銭類出土区間遺構の調査 のみ調査された。
32次	令和6年10月18日 ～12月18日	稲垣町63番4	個人住宅	81.75	弥生時代前期～古墳時代前期 の土器	弥生時代終末～古墳時代前期 の土器	集落跡の調査のみ調査 された。
33次	令和6年1月24日 ～28日	稲垣町1番、101番、 102番、425番、425番1、 425番2、425番3、425番 4	宅跡遺構	61	中塚遺跡の自然遺構	自然遺構から縄文時代前期の土 器が出土した。	古墳調査とあわせて中 塚遺跡の調査が実施され た。
稲垣西沢1次	令和6年11月28日 ～12月19日	稲垣町52番1、814番 1、814番2、814番3、 814番4、814番5、 814番6、814番7、 814番8、814番9、 814番10	古墳群跡	27	弥生時代前期～古墳時代前期 :小穴・武蔵	縄文時代、縄文時代前期～終末 の土器、打石器類 弥生時代前期～古墳前期、弥生 終末～古内期の土器	好古遺跡、814番の調査 結果を踏まえ、調査地 の調査が実施された。
稲垣西沢2次	令和6年11月28日 ～令和6年12月 31日	稲垣町52番1、814番 1、814番2、814番3、 814番4、814番5、 814番6、814番7、 814番8、814番9、 814番10	古墳群跡	823	弥生時代前期～古墳時代前期 :小穴・杖、溝・武蔵	縄文時代、縄文時代前期～終末 の土器 弥生前期～中塚遺跡、弥生終 末～古内期の土器、柱石	稲垣西沢群跡 農園の 調査
34次	令和6年9月6日 ～令和6年12月 31日	稲垣町9番1、643番 2、644番、644番1、 644番2、644番3、 644番4	古墳群跡	1,300	弥生時代前期～古墳時代前期 :溝、土庫	弥生時代前期後半～古墳時代 前期の土器、打石器類、銅製 刀の出土、土庫類	29年度調査の西沢群跡 調査、併せて調査地 の調査が実施された。調査 結果を踏まえ、調査地 の調査が実施された。
35次	令和6年9月25日 ～令和6年9月27 日	稲垣町9番1、643番 2、644番	個人住宅	20	弥生時代前期～古墳時代前期 :土溝、柱穴	弥生時代終末～古墳時代前期 の土器	稲垣町集落の調査 19年度調査結果の調査 結果を踏まえ、調査地 の調査が実施された。
36次	令和6年9月24日 ～9月24日	稲垣町9番1、643番 2、644番	個人住宅	36	なし	なし	集落跡の調査のみ調査 された。
37次	令和6年11月21日 ～令和6年12月 22日	稲垣町18番6	分譲住宅	35.4	弥生時代前期～古墳前期:土溝	弥生時代前期～古墳前期の土器	北塚遺跡の調査のみ調査 された。
38次	令和6年11月21日 ～令和6年12月 22日	稲垣町18番6	個人住宅	6	なし	なし	集落跡の調査のみ調査 された。
39次	令和6年11月21日 ～令和6年12月 22日	稲垣町18番13	個人住宅	68.1	柱穴・板土を含む土居	弥生時代終末の土器	北塚遺跡の調査のみ調査 された。
稲垣西沢3次	令和6年9月3日 ～令和6年9月3 1日	稲垣町69番、610番	古墳群跡	1,136.5	中塚遺跡、小穴	縄文時代、縄文時代前期～終末 の土器 弥生時代～古墳前期の土器	農園の調査と兼用の一部 の調査が実施された。
40次	令和6年9月3日 ～令和6年9月3 1日	稲垣町63番4、454番 1	古墳群跡	60	弥生時代前期後半～古墳時代前期 :土庫	弥生時代中期末の土器	34年度調査の結果で「南 大塚」の調査が確認さ れた。併せて調査地 の調査が実施された。調査 結果を踏まえ、調査地 の調査が実施された。
稲垣西沢4次	令和6年9月6日 ～令和6年12月 31日	稲垣町9番、810番	古墳群跡	400	縄跡、溝、土溝	弥生時代前期～古墳時代前期の 土器	40年度調査の西沢群跡 調査結果を踏まえ、調査 地帯の調査が実施された。
41次	令和6年7月1日 ～8月21日	稲垣町29番9	個人住宅	82.92	弥生時代前期後半～終末、弥生 建物 弥生時代終末～古墳時代前期 の土器	弥生時代前期後半～終末の 土器	稲垣町集落の調査 19年度調査結果の調査 結果を踏まえ、調査地 の調査が実施された。

【稲垣西沢群跡発掘調査報告書】

- 令和6年教育委員会 1982「稲垣西沢群跡発掘調査報告書」香南市地域文化財調査報告書第2巻
- 令和6年教育委員会 2015「稲垣西沢群跡2次発掘調査報告書」香南市地域文化財調査報告書第61巻
- 令和6年教育委員会 2015「稲垣西沢群跡3次発掘調査報告書」香南市地域文化財調査報告書第62巻
- 令和6年教育委員会 2016「稲垣西沢群跡3次発掘調査報告書」香南市地域文化財調査報告書第66巻
- 令和6年教育委員会 2018「稲垣西沢群跡3次発掘調査報告書」香南市地域文化財調査報告書第71巻
- 令和6年教育委員会 2019「令和26年度香南市内陸群跡発掘調査報告書」香南市地域文化財調査報告書第76巻
- 令和6年 2020「香南市内陸群跡発掘調査報告書 稲垣西沢群跡3次、第12次」香南市地域文化財調査報告書第90巻
- 令和6年 2022「香南市内陸群跡発掘調査報告書 稲垣西沢群跡5次」香南市地域文化財調査報告書第98巻

工事に伴う掘削深度および基礎の柱状改良工事の工法を比較検討した結果、遺構面上の保護層が得られないことから、事業者と協議を行った。その結果、計画変更が不可能であるため、遺構の現状保存ができない建物部分である55.48㎡を対象に、工事に先立って文化財保護法に基づく本発掘調査を実施する必要性が指摘されたため、同年11月1日付で委託者と埋蔵文化財発掘調査事業委託契約書を取り交わした後、同年11月22日から12月22日まで本発掘調査を実施した。調査に関わる費用は委託者が負担した。

今回の調査区は稲部遺跡としては第37次調査となる。本発掘調査終了後には、2023年（令和5）4月18日から2024年（令和6）3月にかけて整理調査を行い、本報告書の刊行となった。

2 調査の方法と経過

調査区の設定 住宅1棟の範囲を調査区として発掘調査を実施した。報告にあたっては、任意方向のグリッドを国家座標に合わせ直し、周辺調査地点との整合をはかった。

表土掘削 全ての近現代、中世までの層は、バックホーを用いて除去した。排土置き場を十分に確保できなかったことから、砕石層および一部の掘削土を別の場所に搬出し、残りの掘削土は調査対象外となる調査区南部の駐車場予定地に置き、調査を行った。試掘調査の結果を基に、造成土下約1.24mの灰色シルト層を遺構検出面とし、調査区のほぼ全域で大溝が検出された。

遺構精査 遺構検出面は、粘土が少し混じる灰色シルト層の土壌である。一方、遺構の埋土はシルト混じり灰色粘土であり、遺構検出面の灰色シルト層より暗い色調である。遺構内の調査に当たっては、溝の東肩部分に関しては明確な違いがみられるものの、西肩部分に関しては調査区外に位置する可能性が高く、確認できなかったため、東肩を基準に垂直にセクションベルトを設定し、埋土の把握に努めた。遺構内の主な出土遺物については、出土状態図を作成し、取り上げを行った。

記録の作成 遺構の平面図と土層断面図は適宜水糸を張り、縮尺20分の1で人力により作成した。遺物の出土状態図も縮尺20分の1とした。



第3図 SD01 大溝の調査状況 1



第4図 SD01 大溝の調査状況 2

調査の経過 11月22日にバックホーによって表土掘削を開始し、11月28日終了した。11月30日に調査区壁面の精査を行った後、北壁と東壁の断面図の作成を行った。12月1日から調査区内の精査と遺構検出を行い、試掘で確認した溝と考えられる遺構を確認したものの、試掘の所見よりも規模が大きいため、落ち込みあるいは谷である可能性も考えられたため、明らかである東肩部を基準に垂直にセクションベルトを2ヶ所設定し、土層の堆積状況の把握に努めた。12月5日には、堆積の状況と落ち込みあるいは谷と考えていた部分の底部において、西側への立ち上がりが確認され、大溝であることが明らかとなったため、SD01として調査をすすめた。SD01からは、土器や建築部材が出土したため、適宜図面と写真によって記録した。12月16日には、全体清掃後、全景の写真撮影を行った。12月19日から、土層観察用のベルトの掘削を行った。12月20日から調査区の埋戻しを開始し、12月22日に調査を終えた。

整理調査 報告書作成作業は彦根市役所および整理室において、2023年（令和5）4月18日から2024年（令和6）3月まで行った。

3 地理的・歴史的環境

（1）地理的環境

稲部遺跡・稲部西遺跡は、北の宇曾川、文祿川と南の愛知川の間に位置するが、北端は現在の文祿川に隣接する位置関係にある。愛知川の河道は、16世紀に洪水によって現在の河道へと変化したと推定されており、それ以前の愛知川の河道の状況と地理的關係をふまえておく必要がある。文祿川と来迎川は、愛知・神崎郡界に沿う流路で、特に規模が大きく、かつてはここに愛知川の主流路があったと考えられている。かつての愛知川は、稲部町、彦富町から湖岸の薩摩町、柳川町へと流れていたが、その旧愛知川の河道が文祿川と来迎川である。来迎川は2次調査区から南へ約600mの位置を流れ、彦富町から柳川町へと至る。文祿川は稲部遺跡における弥生・古墳時代集落の北側を流れ、稲部町から薩摩町へ至る。このように、稲部遺跡・稲部西遺跡は、旧愛知川の河道に挟まれた微高地上に立地している。愛知川は、中流付近までは河岸段丘を形成し、その下流は天井川となっている。現在の下流部河道は、JR東海道本線愛知川鉄橋の付近から西に曲がり、新海浜の河口まで達している。現在の河道は、16世紀の洪水によって河道が変化するまでは支流であり、かつては愛知川中宿から北流する本流が、甲崎町まで蛇行しながら琵琶湖に注いでいたと考えられる。愛知川の移動の正確な時期は不明であるが、寺田所平が取り上げた二つの洪水伝承が有力な根拠となっている。一つは、天文13年（1544）7月の洪水で、粟見荘の氏神である粟見大宮天神社の社殿が現在地に流れ着いたという伝承である。もう一つは、近世に作られた同社の由緒書「神崎郡粟見大宮天神社記」の永祿6年（1563）5月の大洪水で愛知川の流路が変わったという記事である。愛知川の移動時期の両期は、16世紀代に求められ、この頃上限に、それまで内湾であった大中の湖は琵琶湖最大の内湖になったと考えられている。湖岸には浜堤が発達し、その背後にある標高86m以下の低地



第5図 稲部遺跡周辺の遺跡

第2表 周辺遺跡一覧

彦根市

遺跡番号	遺跡名	フリガナ	所在地	種類	時代	立地	現状
202-146	稲部西遺跡	イハベニシイキ	稲部町	集落跡	縄文～中世	平地	水田
202-147	稲部遺跡	イハベイキ	稲部町	集落跡	縄文～中世	平地	宅地 水田 その他
202-148	沢田遺跡	サワダイキ	稲部町	散布地	弥生～平安	平地	水田 宅地
202-154	彦富城跡	ヒコトミシヨウゴ	彦富町	城館跡	中世	平地	その他
202-155	彦富南遺跡	ヒコトミナミイキ	彦富町	散布地	古墳	平地	水田
202-156	金田遺跡	カナダイキ	金田町	集落跡	弥生～中世	平地	水田 宅地 その他
202-159	平流域跡	ヘイリョウク	稲里町	城館跡	中世	平地	宅地
202-161	稲里遺跡	イナリイキ	稲里町	集落跡	弥生	平地	水田
202-162	下稲葉遺跡	シモイハベイキ	下稲葉町	散布地	古墳～平安	平地	水田
202-163	十輪寺遺跡	ジュリンジイキ	下稲葉町	散布地	その他	平地	水田 宅地
202-164	地福寺遺跡	チフクジイキ	下稲葉町	散布地	その他	平地	水田 宅地
202-165	出路遺跡	デツチイキ	出路町	集落跡 その他 墓跡	古墳～平安	平地	水田 宅地
202-166	本庄城跡	ホンジヨウシヨウゴ	本庄町	城館跡	中世	平地	水田
202-167	本庄北遺跡	ホンジヨウキタイキ	本庄町	散布地	古墳	平地	水田
202-168	芝原遺跡	シハライキ	本庄町・田原町	集落跡	古墳～平安	平地	水田 その他
202-169	本庄東遺跡	ホンジヨウヒガシイキ	本庄町	散布地	古墳	平地	水田
202-170	安田遺跡	ヤスタイキ	本庄町	散布地	古墳	平地	水田 宅地
202-171	藤木遺跡	フジキイキ	普光寺町	散布地	古墳～平安	平地	水田
202-172	普光寺廃寺遺跡	フクウジハヅイキ	普光寺町・上西川町	社寺跡 集落跡 古墳	弥生～奈良	平地	水田
202-173	普光寺北遺跡	フクウジキタイキ	普光寺町・柳川町	散布地	古墳～平安	平地	水田
202-175	三ノ坪遺跡	ミノツツイキ	南三ツ谷町	散布地	古墳～平安	平地	水田
202-180	国領遺跡	クニノウイキ	田附町	集落跡	古墳～中世	平地	水田 畑地
202-184	中川館跡	ナカガワカノヤ	下岡部町	城館跡	中世	平地	その他
202-188	後池遺跡	アトイケイキ	柳川町	散布地	古墳～平安	平地	水田
202-189	大正遺跡	ダイショウイキ	柳川町	散布地	古墳～平安	平地	水田 宅地
202-190	甲崎城跡	カウサキシヨウゴ	甲崎町	城館跡	中世	平地	宅地
202-191	下西川館跡	シモシカワカノヤ	下西川町	城館跡	中世	平地	宅地
202-192	上西川館跡	カミシカワカノヤ	上西川町	城館跡	中世	平地	宅地
202-193	屋中寺廃寺遺跡	ヤチュウジハヅイキ	上岡部町	社寺跡 集落跡	縄文～平安	平地	水田 その他
202-194	下岡部西遺跡	シモオカベニシイキ	下岡部町	集落跡 社寺跡	古墳～中世	平地	水田 その他
202-195	田原遺跡	タハライキ	田原町	散布地	古墳	平地	水田 宅地

第2表 周辺遺跡一覧

東近江市

遺跡番号	遺跡名	フリガナ	所在地	種類	時代	立地	現状
403-001	神郷亀塚古墳	ジノコ'カメ'カヅ'カヅ	長勝寺町	古墳	古墳	平地	水田
403-003	斗西遺跡	ト'ニシ'イキ	佐野町・神郷町	集落跡	弥生～ 平安	平地	水田 宅地
403-004	正楽寺遺跡	ショウラク'ジ'イキ	神郷町・種町	集落跡	縄文～ 室町	平地	水田 宅地
403-006	中山古墳群	ナカヤマ'コフン'グン	長勝寺町・神郷町・ 五個荘和田町	古墳	古墳	山頂 平地	山林 水田
403-007	種北遺跡	タネキタ'イキ	種町	散布地	平安・ 室町	平地	宅地
403-008	八仏手城遺跡	ヤブ'テ'シヨウ'イキ	種町	城館跡	その他	平地	宅地
403-009	信願寺遺跡	シノガン'ジ'イキ	種町	集落跡 その他 (伝承地)	中世～ 江戸	平地	水田 宅地
403-010	種村城遺跡	タネムラ'シヨウ'イキ	種町	城館跡	鎌倉・ 室町	平地	宅地
403-011	善教寺遺跡	ゼンキョウ'ジ'イキ	種町	その他 (伝承地) 集落跡	縄文	平地	水田 宅地
403-012	柿堂遺跡	カキ'ドウ'イキ	今町	集落跡	弥生・ 奈良・ 平安	平地	水田
403-013	今安楽寺遺跡	イマ'アンラク'ジ'イキ	今町	社寺跡	縄文・ 弥生・ 平安	平地	水田 工場
403-014	千里遺跡	セリ'イキ	今町	集落跡	弥生	平地	水田 宅地
403-015	能登川政所遺跡	ノト'カミ'コト'イキ	今町	集落跡	中世	平地	水田 宅地
403-016	垣見南遺跡	カキミ'ミナ'イキ	垣見町	散布地	弥生・ 古墳	平地	造成地
403-017	掛樋遺跡	カケ'ヒ'イキ	垣見町	集落跡	平安	平地	水田 宅地
403-018	垣見北遺跡	カキミ'キタ'イキ	垣見町	集落跡	古墳・ 奈良	平地	水田
403-019	垣見城遺跡	カキミ'シヨウ'イキ	垣見町	城館跡	鎌倉・ 室町	平地	宅地
403-020	楞嚴寺遺跡	リョウ'ガン'ジ'イキ	垣見町	その他 (伝承地)	その他	平地	宅地
403-022	九文町遺跡	クニ'フミ'イキ	慧光寺町	散布地	平安	平地	水田 宅地
403-023	慧光寺遺跡	タモ'クワ'ジ'イキ	慧光寺町	社寺跡	奈良	平地	水田
403-024	正見寺遺跡	ショウ'ケン'イキ	慧光寺町	社寺跡	その他	平地	社地
403-025	西部社古墳	ニシ'ウ'ヤシロ'カヅ	慧光寺町	古墳	古墳	平地	社地
403-026	殿衛遺跡	ト'ノエ'イキ	慧光寺町	集落跡	弥生・ 平安	平地	水田 宅地
403-027	国領北遺跡	クニ'ノリ'キタ'イキ	小川町・慧光寺町	散布地	その他	平地	水田
403-028	庄地遺跡	ショウ'ジ'イキ	小川町	散布地	古墳・ 平安	平地	水田
403-029	能登川宮の前遺跡	ノト'カミ'ノマエ'イキ	小川町	集落跡	弥生～ 平安	平地	水田 宅地
403-030	小川遺跡	オガ'ワ'イキ	小川町	社寺跡	その他	平地	水田
403-031	小川城遺跡	オガ'ワ'シヨウ'イキ	小川町	城館跡	室町	平地	宅地
403-032	三敷前遺跡	サン'シキ'ノマエ'イキ	小川町	集落跡	縄文・ 弥生・ 平安	平地	水田
403-033	寺前遺跡	テラ'マエ'イキ	川南町	散布地	その他	平地	水田 宅地

第2表 周辺遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	フリガナ	所在地	種類	時代	立地	現状
403-034	川南城遺跡	カハシメシヨウイキ	川南町	城館跡	鎌倉・中世	平地	宅地
403-035	阿弥陀堂遺跡	アマタドウイキ	阿弥陀堂町	集落跡 社寺跡	その他	平地	水田 宅地
403-038	大厳寺遺跡	オホイケンジイキ	新宮町	社寺跡	その他	平地	水田 宅地
403-039	新村城遺跡	シムラシヨウイキ	新宮町	城館跡 集落跡	室町	平地	宅地
403-040	新村遺跡	シムライキ	新宮町	散布地	鎌倉・室町	平地	水田 宅地
403-046	中村堂遺跡	ナカムラドウイキ	能登川町	集落跡 社寺跡	鎌倉・室町	平地	水田 宅地
403-047	妙心寺遺跡	ミョウシンジイキ	能登川町	その他 (用水路跡)	平安	平地	宅地
403-049	大徳寺北遺跡	オホトクテンキタイキ	能登川町・伊庭町	集落跡	平安・室町	平地	宅地
403-052	五十遺跡	ゴジウイキ	南須田町	城館跡	室町	山麓	水田 公園
403-062	岩神遺跡	イワガミイキ	伊庭町	集落跡	その他	平地	校地
403-072	能登川横田遺跡	ノトガワヨコタイキ	佐野町	集落跡	その他	平地	宅地
403-073	善勝寺遺跡	ゼンショウジイキ	佐野町	社寺跡	その他	山腹	山林
403-074	善勝寺裏山遺跡	ゼンショウジウラヤマイキ	佐野町	古墳群 その他跡	古墳	山腹	山林
403-076	法堂寺遺跡	ホウドウジイキ	佐野町	集落跡	縄文～室町	平地	宅地
403-077	中沢遺跡	ナカザワイキ	佐野町・種町	集落跡	弥生～奈良	平地	水田 宅地
403-078	鍛冶屋遺跡	カネヤイキ	佐生町・佐野町	集落跡	弥生～奈良	平地	水田 宅地
403-081	猪子遺跡	イノイキ	猪子町	社寺跡 集落跡	古墳	平地	水田 宅地
403-082	能登川五位田遺跡	ノトガワイイノイイイキ	猪子町	集落跡	弥生	平地	宅地 校地
403-083	泉合寺遺跡	イヅノガヒイキ	猪子町	社寺跡	白鳳・奈良	平地	宅地
403-084	長福寺遺跡	チヨウフクジイキ	猪子町	社寺跡 集落跡 古墳	古墳・平安・室町	山麓	宅地
403-089	上山神社遺跡	ウヤマシナジイキ	山路町	集落跡	鎌倉・室町	平地	水田
403-090	山路城遺跡	ヤマジシヨウイキ	山路町	城館跡	室町	平地	宅地
403-091	能登川石田遺跡	ノトガワイシダイキ	林町・山路町	集落跡	縄文～室町	平地	水田 宅地
403-092	林遺跡	ハヤシイキ	林町・山路町	集落跡	縄文～室町	平地	水田 宅地
403-095	西浦遺跡	ニシウライキ	猪子町	集落跡	奈良	平地	宅地
403-096	西ノ辻遺跡	ニシノツジイキ	佐野町	集落跡	古墳～室町	平地	宅地
403-097	佐野南遺跡	サノナミイキ	佐野町	集落跡	平安・室町	平地	水田 宅地
403-099	高岸遺跡	タカギイキ	伊庭町	集落跡	平安	平地	水田
403-100	佐生北遺跡	サノキタイキ	佐生町	集落跡	古墳	平地	宅地
403-101	佐野西浦遺跡	サノニシウライキ	佐野町	散布地	古墳	平地	宅地
403-102	法堂寺廃寺跡	ホウドウジハシヤト	佐野町	社寺跡	白鳳・奈良	平地	公園
403-103	平加神社遺跡	ヘカシナジイキ	神郷町	その他 墳墓	鎌倉・室町	平地	社地

部には後背湿地や内湖が広がっていた。愛知川河口部付近から石寺町付近までは入江や水路があり、低湿な景観が展開していた。現在でも、柳川町に残る湾入部や荒神山山麓の曾根沼がその名残をとどめている。

また、愛知川は氾濫による洪水を頻発しており、過去の記録によると、文化6年（1806）には、田附町の「湯の花井」の堤防が決壊し、国領村の集落50戸のうち40戸が流出するという災害のあったことが知られる。こうした環境のなかで、人々は洪水によって形成された自然堤防上に村落を営み、洪水の被害に耐えながら耕地の経営を行っていたのであろう。現在分布する集落の多くが、愛知川の堤防沿い、あるいは旧河道に残る自然堤防上に立地することからも、このことをよく示している。明治初期に作成された地籍図によると、現在の集落の位置とほとんど変わらず、少なくとも近世の集落と現在の集落の位置は、ほぼ一致しているといえる。また中世の集落についても、中世から近世につながる集落が多いという発掘調査の成果を考慮すると、ほぼ重複している可能性がある。さらに、現在確認できる遺跡の分布状況を見ると、自然堤防上に連なっていることに注目できる。すなわち、出路町から甲崎町をへて薩摩町に至る文禄川流域、彦富町西側から普光寺町をへて薩摩町西側に及ぶ来迎川流域、そして本庄町から南三ツ谷町を結ぶ範囲の三つの地域は、愛知川によって形成された自然堤防であるとみられ、縄文・弥生時代以降の遺跡が分布しているのである。同様に、東近江市域に位置する愛知川左岸域においても自然堤防上に縄文・弥生時代以降の遺跡が展開している。

（2）歴史的環境

縄文時代 縄文時代の遺跡では、屋中寺廃寺遺跡で縄文時代早期後半の押型文土器、中期の船元式や北白川式土器が包含層から出土している。稲部遺跡では縄文時代後期の堅穴建物が検出されている。愛荘町なまづ遺跡では、晩期後葉の土器棺が検出され、愛荘町長野遺跡においても同時期の土器が出土している。肥田町肥田城跡では、晩期の刻目凸帯文土器が出土している。一方、愛知川左岸域においても縄文時代後期の集落が展開し、石田遺跡、今安楽寺遺跡、正楽寺遺跡で堅穴建物が検出されている。特に正楽寺遺跡は、縄文時代後期の大規模集落と考えられている。

弥生時代前期 弥生時代前期の遺跡は数少ないが、稲里町稲里遺跡で炭化米、アワ、キビが出土し、水稻農耕が開始されている。

弥生時代中期 湖東北部地域の中核的な集落遺跡とみられる川瀬馬場遺跡では、Ⅲ様式からⅣ様式の土器が出土しており、Ⅳ様式が主体である。集落の周囲に溝をめぐらし、掘立柱建物で構成される集落である。宇曾川左岸の微高地上に立地する肥田西遺跡では、弥生時代中期後半の方形周溝墓の周溝とみられる溝が検出され、一部の溝から弥生時代中期後半（Ⅳ様式期）の特徴をもつ土器が出土し、Ⅳ様式後半の土器群で、回線文系土器の良好な一括資料と評価できる。方形周溝墓域としては、彦根市域で最も古い例である。また、長野遺跡、なまづ遺

跡、屋中寺廃寺遺跡、荒神山東麓に位置する妙楽寺遺跡と川瀬馬場遺跡で遺構と遺物が確認されている。

弥生時代後期 稲部遺跡・稲部西遺跡の集落の中心となる時期である弥生時代後期から古墳時代前期については、愛知川流域の当該期の遺跡についてみておく必要がある。

弥生時代後期では、妙楽寺遺跡で集落が継続し、堅穴建物が検出されている。長野遺跡、屋中寺廃寺遺跡、荒神山東麓に位置する妙楽寺遺跡で遺構と遺物が確認されている。

稲部遺跡では、弥生時代後期後半の土器が大溝や土坑から出土している。愛知川左岸域では、弥生時代中期の集落として、大中の湖南遺跡、中沢遺跡、宮の前遺跡が形成され、弥生時代後期の集落では、能登川石田遺跡で大規模な中核的集落が出現する。石田遺跡は大溝を備え、送風管、土製鋳型外枠、金属成分付着被熱粘土の出土から、青銅器鑄造が行われていたことを示し、近年の調査では双孔をもつ銅劍切先部が出土している。弥生時代後期末になると、衰退する。

弥生時代終末・古墳時代初頭 弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけては、稲部遺跡、長野遺跡や現愛知川対岸の斗西遺跡で集落が確認されている。稲部遺跡・稲部西遺跡における近年の調査では、庄内式期から布留式期にかけての土器が多数出土し、堅穴建物、周溝付建物、掘立柱建物からなる大規模な集落遺跡であることが明らかになるとともに、金属器生産関連遺構・遺物も検出され、調査の進展により、愛知川流域における拠点集落としての性格が徐々に明らかになってきている。また、稲部遺跡・稲部西遺跡と呼応するように、斗西遺跡では、多数の堅穴建物が検出されており、県下有数の大規模集落として知られる。畿内系、山陰系、北陸系、東海系、讃岐系の土器が出土し、地域間の交流拠点としての性格も示し、古墳時代を通して継続する集落である。その近くには、前方後方形墳丘墓あるいは最古級の前方後方墳とされる神郷亀塚古墳が築造されている。

稲部遺跡よりも湖岸近くに位置する普光寺町の普光寺廃寺遺跡でも近い時期の集落が確認され、庄内式期を中心とした古式土師器が出土している。肥田城跡では、庄内式期の導水施設が検出され、2本の木樋が出土し、屋中寺廃寺遺跡でも同様な木樋が出土しており、両者ともに当該期の灌漑技術に関わる遺構として注目される。一方、内陸の鈴鹿山麓に位置する百済寺南川遺跡は、標高360～400mの山地に位置する庄内式期から布留式期にかけての集落である。堅穴建物6棟が検出され、地形の検討から周辺部でさらに多くの堅穴建物の存在が予想されている。谷地形にあって、眺望を目的とした立地環境ではなく、尾根に挟まれているために、防御性も低い。北伊勢につながる鈴鹿山地を越えるルートの起点に位置することから、交通路の掌握と管理に関わる集落の可能性がある。

古墳時代前期 斗西遺跡では弥生後期後半から溝が掘削されているが、布留式期古段階には埋没し、中沢遺跡の溝もほぼ同時期に埋没するようである。両遺跡ともに湖東地域の拠点集落として古墳時代中期まで継続する。斗西遺跡・中沢遺跡の至近に位置する西ノ辻遺跡では、布

留式新段階のL字形カマドを伴う竪穴建物が検出されている。本庄町芝原遺跡では主に竪穴建物からなる集落が確認され、古墳時代前期後半の竪穴建物からは、高坏転用の送風管と鉄滓が出土し、この時期の数少ない鍛冶工場の例として注目できる。

古墳としては、荒神山山頂部に全長124mを測る古墳時代前期末の前方後円墳である荒神山古墳が築かれる。

古墳時代中期・後期 古墳時代中期の集落としては、斗西遺跡に隣接する中沢遺跡で多くの竪穴建物がある。続く古墳時代後期の集落では、芝原遺跡と出路遺跡が知られる。なまず遺跡では古墳時代後期の大壁造建物が検出され、渡来系氏族との関係が推測される。

荒神山古墳周辺では明確な中期古墳は確認されていないが、荒神山南裾に馬蹄形の地割痕跡がみられ、「塚村」の地名ともあわせて前方後円墳の存在する可能性が指摘されている。仮に古墳であるとすると、墳丘長105m、周濠を含めると158mの大型古墳となる。後期には、荒神山に群集墳が営まれ、中には正方形プラン穹窿頂持ち送り石室をもつ古墳も築かれ、やはり渡来系氏族との関係がうかがわれる。その他、普光寺町のゲホウ山古墳で埴輪をもつ後期古墳、肥田町の塚左手古墳で埴輪と木製土物をもつ後期古墳が確認されている。

古代 古代になると、市域南部の湖岸近くにおいて普光寺廃寺、屋中寺廃寺、下岡部廃寺、八坂廃寺の白鳳寺院が建立される。奈良時代には、荒神山北麓の東大寺額願流荘の存在が知られる。正倉院に残る埴田絵図によると、愛知・犬上両郡にまたがる70町が東大寺に施入され、額願流荘が成立したという。また、延久2年(1070)の『近江国弘福寺領庄田目進状』により愛知郡2条7里・8里・3条16里に弘福寺領平流荘が存在したことが記されており、和銅2年(709)の『弘福寺水陸田目録』に「依智郡田老拾老町老段參拾陸歩」とみえることから、弘福寺領平流荘は8世紀初頭には成立していたものと考えられている。具体的な所在地としては、荒神山南麓の下岡部廃寺と屋中寺廃寺に挟まれた地と推定されている。

この時代の遺跡としては、普光寺廃寺遺跡、芝原遺跡、肥田城跡、国領遺跡、長野遺跡、なまず遺跡、香掛遺跡が確認されている。長野遺跡、なまず遺跡、香掛遺跡付近には、古代東山道に比定される近世中山道が通り、愛知郡衙の存在も想定されている。長野遺跡では奈良時代後期の「上殿」、「寺」の墨書土器や転用硯、なまず遺跡では「郡」の墨書土器、香掛遺跡では「愛女」の墨書土器や転用硯などが出土している。長野集落にある大瀧神社はもと「大領宮」と号していたことも注目される。平安時代になっても国領遺跡では続いて集落が営まれるが、再び普光寺廃寺遺跡、芝原遺跡、肥田城跡でも集落が確認されている。なかでも芝原遺跡では9世紀の京都産緑釉陶器皿、畿内産黒色土器碗、灰釉陶器皿の転用硯がまとまって出土し、一般集落とは異なる様相である。

中世 平安時代後期から鎌倉時代にかけての集落が国領遺跡、出路遺跡、金田遺跡、普光寺廃寺遺跡、市遺跡で営まれる。国領遺跡では11・12世紀を中心とする中世前期の集落があり、出土土器は黒色土器を主体とし、大量の土師器皿が廃棄されていた。これに加えて、15世紀以

降の柿椀が溝から出土している。国領遺跡や出路遺跡では中世後期の遺物も出土しており、周辺の地域では中世後期においても集落が存在していると考えられる。金田遺跡では、10世紀から始まり、13世紀頃まで集落が存続している。金田遺跡、出路遺跡周辺では、愛知郡と神崎郡の郡界に出路市があったとされ、琵琶湖を介して柳川、薩摩港から物資を内陸に運び入れ、市に荷揚げされていたと考えられている。その詳細な場所は不明であるが、本庄町の本庄出路、金田町の北出路の二つがあったとされる。『今堀日吉神社文書』によると、金田遺跡や出路遺跡周辺では、16世紀前半には出路市が存在したことがわかり、文禄川と来迎川を利用した水運と灌漑用水に関連する集落が成立していた地域であると考えられている。

宇曾川下流域に立地する妙楽寺遺跡では室町時代を中心とする遺構が検出され、15世紀末から16世紀後半には、条里地割に方位を揃える水路と道路によって整然と区画された屋敷地が検出されている。貿易陶磁や茶道具も多く出土し、琵琶湖と宇曾川の水運によって繁栄した商業を生業とする都市的空間であったと考えられている。この妙楽寺遺跡と宇曾川を隔てた対岸には古屋敷遺跡が位置する。道路や土塁で区画された屋敷地が確認され、存続時期が妙楽寺遺跡と一致することから、両遺跡は一体のものと考えられている。しかし、妙楽寺遺跡が水路によって区画されているのに対し、古屋敷遺跡では道路や土塁で区画されている点や古屋敷遺跡では妙楽寺遺跡に比べて茶器よりも日常雑器の占める割合が高いなどの違いも認められる。

室町時代後期には、肥田城跡をはじめとした城館が築かれる。肥田城は、高野瀬氏が築城し、織豊政権下では蜂屋氏、長谷川氏の居城となった。肥田城の中核部としては、小字「上新田」、「下新田」であったと推定されている。また、その北西側と南西側には「勘ケ由屋敷」、「孫右衛門」、「藤藏屋敷」、「丹波屋敷」、「休ケ屋敷」、「新助屋敷」、「民部屋敷」などの小字があり、家臣団屋敷がひろがっていたと考えられている。

近世 江戸時代においては、稲部遺跡・稲部西遺跡の一带は、現在の稲部町・彦富町域にあたり、稲部町域は野部村、稲部町南部と彦富町域は彦留村と呼ばれていた。周辺に田地と畑地が広く展開する村であり、村域を流れる文禄川と来迎川は、舟運路として重視された河川であり、舟着場が設けられていたとされる金田村から琵琶湖岸の石寺村間を結ぶ年貢米運漕路として利用されていた。

参考文献

- 愛知川町教育委員会 1985『沓掛遺跡・市遺跡Ⅲ発掘調査概要』
- 愛知川町教育委員会 2002『なまず遺跡』
- 愛知川町 2005『近江愛知川の歴史 第1巻』
- 北原治 2002「弘福寺受領愛智郡平流荘について」『紀要』第15号 財団法人滋賀県文化財保護協会
- 古関大樹 2013「第2章第1節 大中の湖の変容」『東近江市史 能登川の歴史第2巻中世・近世編』
- 佐原真 1960「第1章先史時代」『彦根市史 上冊』彦根市役所
- 滋賀県教育委員会 1967『大中の湖南遺跡調査概要』

- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1986『妙楽寺遺跡Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1986『妙楽寺遺跡Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1988『肥田城遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1989『妙楽寺遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995『芝原遺跡・出路遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995『普光寺廃寺・屋中寺廃寺』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1997『芝原遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998『出路遺跡・彦富城遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998『屋中寺廃寺遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1998『普光寺廃寺遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999『神ノ木遺跡・堀南遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1999『長野遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001『長野遺跡Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2001『稲里遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2003『市遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2004『金田遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『八坂東遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2006『国領遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2007『百済寺遺跡』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2008『長野遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2008『肥田城Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 2010『肥田城遺跡・肥田西遺跡・鶴田遺跡』
- 寺田所平 1980『稲枝の歴史』
- 能登川町教育委員会 1988『斗西遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集
- 能登川町教育委員会 1988『中沢遺跡（第3次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第11集
- 能登川町教育委員会 1990『中沢遺跡（第4次）・正楽寺遺跡（第3次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第15集
- 能登川町教育委員会 1991『垣見北遺跡（第1次）・中沢遺跡（第5・6次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第21集
- 能登川町教育委員会 1991『垣見北遺跡（第2次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第20集
- 能登川町教育委員会 1993『斗西遺跡（2次調査）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第27集
- 能登川町教育委員会 1993『斗西遺跡（3次調査）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第31集
- 能登川町教育委員会 1993『西ノ辻遺跡・佐野南遺跡・法堂寺遺跡（第3次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第30集
- 能登川町教育委員会 1995『斗西遺跡（4次調査）・法堂寺遺跡（5次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第35集
- 能登川町教育委員会 1995『林・石田遺跡』能登川町埋蔵文化財調査報告書第36集
- 能登川町教育委員会 1998『斗西遺跡（9・10・14次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第44集
- 能登川町教育委員会 1999『斗西遺跡（13次）・鍛冶屋敷（3次）』能登川町埋蔵文化財調査報告書第46集

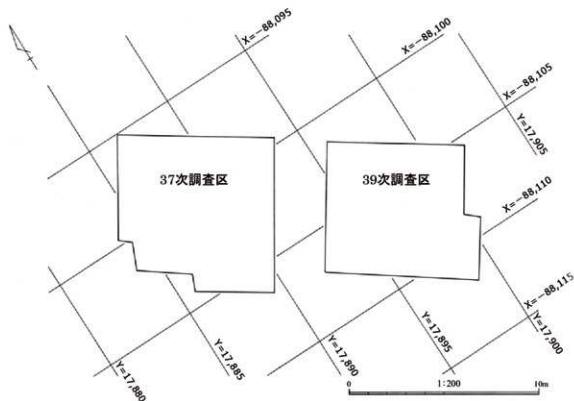
- 能登川町教育委員会 200『佐生北遺跡 (2次)・石田遺跡 (6次)』能登川町埋蔵文化財調査報告書第49集
- 能登川町教育委員会 2001『石田遺跡 (4次)・中沢遺跡 (13次)・斗西遺跡 (17次)』能登川町埋蔵文化財調査報告書第50集
- 能登川町教育委員会 2004『神部亀塚古墳』能登川町埋蔵文化財調査報告書第55集
- 能登川町教育委員会 2005『石田遺跡—能登川駅西土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書』能登川町埋蔵文化財調査報告書第58集
- 能登川町教育委員会 2005『石田遺跡 (19・21次)・殿衛遺跡 (3次)』能登川町埋蔵文化財調査報告書第60集
- 東近江市教育委員会 2007『中沢遺跡 (15次)』東近江市埋蔵文化財調査報告書第6集
- 東近江市史能登川の歴史編集委員会 2011『東近江市史 能登川の歴史第1巻原始・古代編』
- 彦根市 2007『新修彦根市史 第1巻』
- 彦根市教育委員会 1982『稲部遺跡』彦根市埋蔵文化財調査報告第3集
- 彦根市教育委員会 1987『古屋敷遺跡発掘調査概要報告書』
- 彦根市教育委員会 1988『馬場遺跡』
- 彦根市教育委員会 2008『荒神山古墳Ⅲ・Ⅳ』彦根市文化財調査報告書第2集
- 彦根市教育委員会 2010『荒神山古墳』彦根市文化財調査報告書第2集
- 彦根市教育委員会 2011『川瀬馬場遺跡Ⅲ』彦根市埋蔵文化財調査報告第47集
- 彦根市教育委員会 2015『稲部遺跡第2次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第61集
- 彦根市教育委員会 2015『稲部西遺跡第1次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第62集
- 彦根市教育委員会 2016『稲部遺跡第3次・稲部西遺跡第2次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第66集
- 彦根市教育委員会 2018『稲部遺跡第9次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告書第71集
- 彦根市史編集委員会 2001『彦根 明治の古地図1』

第2章 調査成果

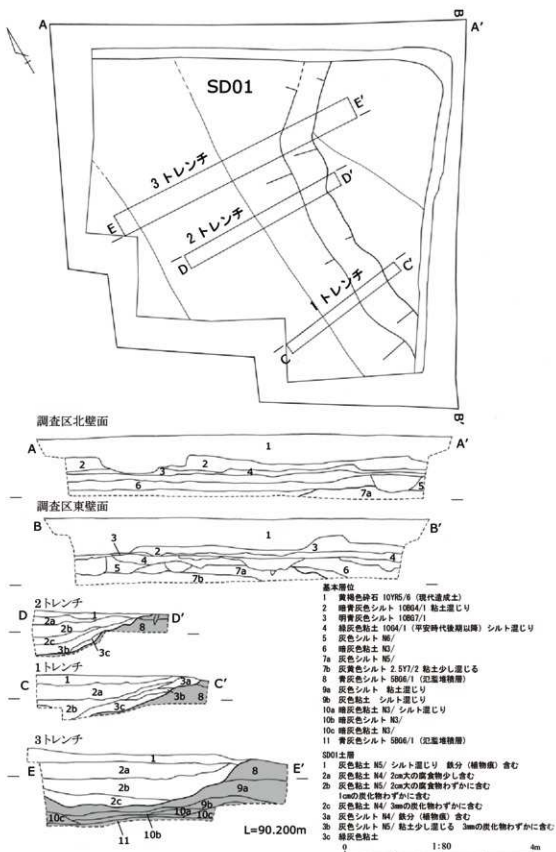
1 基本層位

本調査区の基本層位としては、表土から順に、第1層 黄褐色碎石 (10YR5/6) の現代の造成土、第2層 暗青灰色シルト、粘土混じり (10BG4/1)、第3層 明青灰色シルト (10BG7/1)、第4層 緑灰色粘土 シルト混じり (10BG/1) の平安時代後期以降の層、第5層 灰色シルト (N6/), 第6層 暗灰色粘土 (N3/), 第7a層 灰色シルト (N5/), 第7b層 灰黄色シルト 粘土少し混じる (2.5Y7/2)、第8層 青灰色シルト (5BG6/1) の氾濫堆積層、第9a層 灰色シルト 粘土混じり、第9b層 灰色粘土 シルト混じり、第10a層 暗灰色粘土 シルト混じり (N3/), 第10b層 暗灰色シルト (N3/), 第10c層 暗灰色粘土 (N3/), 第11層 青灰色シルト (5BG6/1) の氾濫堆積層となる。第6層は、古墳時代中期以降SD01埋没後にできた産地に堆積した、落ち込み層である。第7a・7b層は、土壌である。第9a層から第10c層は、SD01開削前の水流を伴う谷部の堆積層である。遺構検出面である第7層上面は、現況地面より1.0m~1.1mの深さで、標高90.50mである。

溝について、試掘調査の際には、東側に広がるものとして考えていたが、調査区西端掘削時に木製品と石器を確認したため、調査区北側の壁面で層位の把握を行った。調査区東端から2.6mの地点で溝の肩を確認し、大溝は西側へ広がることが明らかとなり、調査区西側からは溝の肩が確認されなかったため、調査区外にまで広がる大溝であることが想定された。



第6図 調査区位置図



第7図 調査区全体図・壁面およびトレンチ土層断面図

2 遺構と遺物

(1) SD01 大溝

SD01大溝 第7a層の灰色シルト層上面において遺構検出を行い、大溝1条を調査区のほぼ全面で検出した。SD01の東側の肩部は調査区内に位置しているため検出することができたが、西側の肩部は調査区外に位置し確認することができない。調査区に3箇所の特設トレンチを設定して土層の堆積状況を把握した後、トレンチを基準に設定した区画ごとにSD01の上層から層位ごとに掘削を行い、遺物を層位ごとに取り上げた。溝の主軸は正南北に対して約5°西へ傾いており、調査区内で確認できる幅は4.3mである。深さは、1トレンチの最深部が74cm、標高89.62m、2トレンチの最深部が82cm、標高89.56m、3トレンチの最深部が94cm、標高89.38mを測る。溝の深さは、調査区内で大きな差はないが、北にいくほどやや低くなっている。断面形状は、なだらかな幅広いU字形である。土層は7層に分けることができ、1層、2a～2c層、3a～3c層に分けて報告する。3a・3b層は灰色シルト、3c層は緑灰色粘土を基調とした層で、炭化物をわずかに含む。2a層から2c層は灰色粘土を基調とした層であり、炭化物をわずかに含む。2a層・2b層は、2cmほどの腐植物片を少し含む。1層は灰色粘土を基調とした層であり、シルトが混じる。植物痕と考えられる鉄分が確認できる。

大溝の堆積状況 3層は周りからの流入によって堆積した層であり、庄内式期から布留式期までの遺物を少し含む。SD01掘削後の初期の流入土であり、少なくとも庄内式期までには掘削されたものと考えられる。1トレンチ、2トレンチともに3層が堆積しているものの、3トレンチには3層の堆積が確認できないことから、南側より流入してきたと考えられる。また、大きく深さが異なるわけではないが、1トレンチよりも3トレンチの標高が僅かに低いことや、3層の堆積の状況からみて南から北へ傾斜していたものと考えられる。2層は、流れがほとんどない状態で堆積した粘土層と考えられる。少なくとも2a層と2b層の堆積時には、沼地状になっていたものと推測される。遺物は2c層から僅かに確認できる程度であり、3トレンチより北部から遺物は確認できないため、3層の遺物が2層に混ざった可能性もある。1層はSD01埋没後にできた窪地に堆積した層であると考えられ、大溝としての機能は失われている。また、1層からは古墳時代中期以降の須恵器が確認されていることから、古墳時代中期頃には窪地状になっていたものと考えられる。SD01は幹線水路として掘削されたものであると考えられるが、人為的な堆積は見られず、自然堆積によって埋没したものであるため、浸濫等は頻繁に行われていなかった可能性が高い。

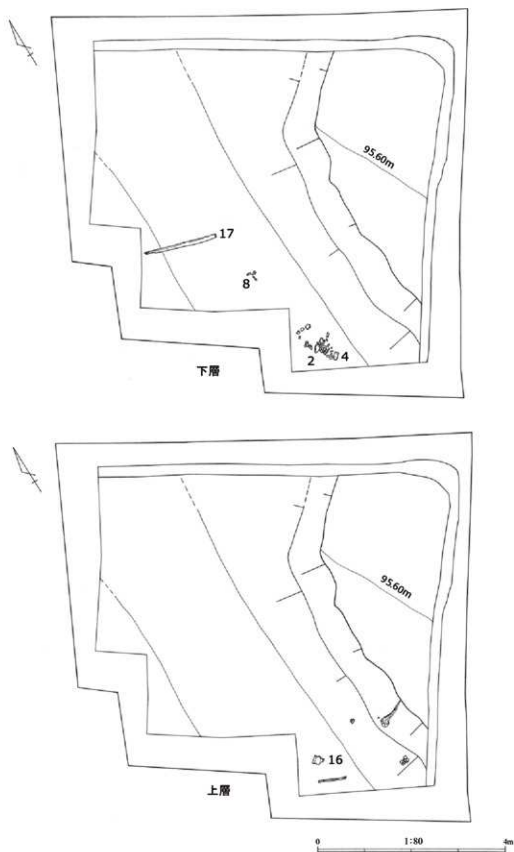
以上、SD01大溝は、溝底に岩石や砂礫の層が確認できなかったことや、砂層が確認できなかったことから、自然流路ではなく、人工的に掘削された溝であると考えられる。また、本報告書では大溝が機能していた時期の堆積層と考えられる3層を下層、2層を上層とし、1層は埋没後の窪地に堆積した層として報告する。

(2) 出土遺物

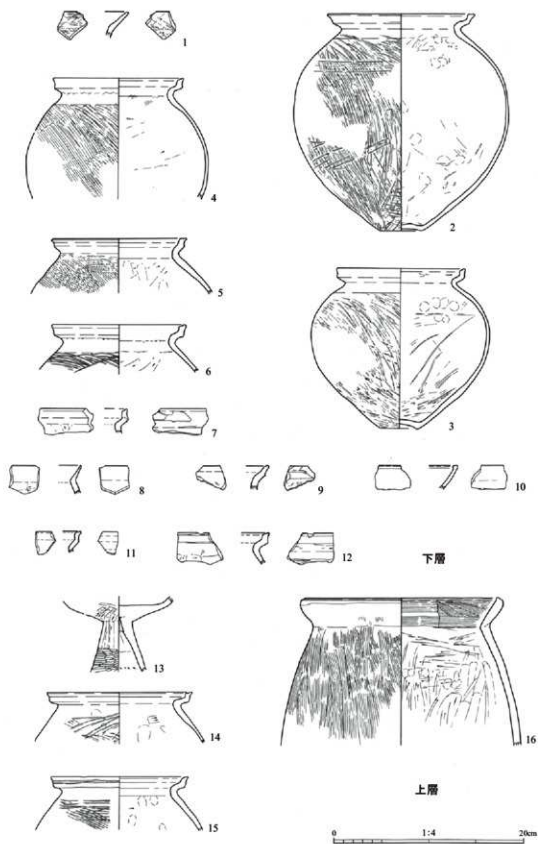
上層と下層から出土した土器の時期については、出土層位と関係性をもち、相対的に下層出土土器が上層出土土器よりも古いものが多いことが予想されるが、上層が堆積する過程において土器が混入することも当然考慮しておく必要がある。以下、各トレンチから出土した土器を上層と下層に分け、層位的に検討しつつ報告する。以下、庄内式期から布留式期の土器を古式土師器として報告する。

下層出土土器 第9図に1~3トレンチの下層から出土した土器を示す。1は、古式土師器の小型丸底鉢である。口縁部が直線的に外反し、外面はケズリの後にヨコ方向の細かなミガキがみられる。また、内面は右斜め上にケズリの後、左斜め上にナデのようにみえる。2~12は、古式土師器の甕である。2~7・9・11・12は受口状口縁である。2・3は、上げ底形を呈する。2は、口径約15.4cm、器高27.9cmを測り、口縁部から底部まで残存する。口縁部はヨコナデで調整され、胴部は内外面全体に、ケズリのちハケで調整後ユビオサエがみられる。外面の底部近くには黒斑が残る。底部はナデで調整される。3は、口径約13.4cm、器高16.9cmを測り、口縁部から底部まで残存する。口縁部はヨコナデで調査され、胴部は内外面共にケズリのちハケで調整され、内面には頸部近くに指頭圧痕、体部には工具痕がみられる。底部はナデで調整される。4は、口径13.8cmを測り、口縁部から胴部上半まで残存する。口縁部は、ヨコナデで調整され、頸部は外面に成形時の指頭圧痕が残り、内面は強いナデによって調整される。胴部は、幅1.5~2cmほどのハケによってナデ調整された後、ナデ調整がされている。また、内面はケズリ後丁寧にナデ調整がされる。5は、口径14.2cmを測り、口縁部から肩部まで残存する。口縁部は、外面をナデ、内面をヨコナデで調整する。肩部は外面をハケナデ、内面をケズリ後粗いナデで調整する。口縁部形及びハケ調整にはS字状口縁台付甕の影響がみられる。6は、口径約14.2cmを測り、口縁部から肩部まで残存する。口縁部は内外面ともヨコナデ、頸部は丁寧にナデと成形時の指頭圧痕が残る。肩部は外面をハケナデ、内面をケズリ後丁寧にナデ調整する。7は、外面にススの付着がみられる。8は、くの字状口縁の甕である。10は、口縁部先端が内側に肥厚する布留形甕である。12は、頸部にススの付着がみられる。ハケとナデによって調整される。

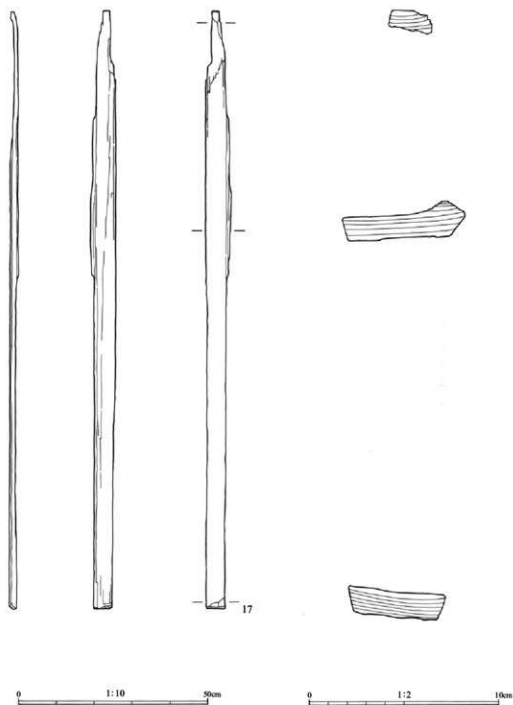
上層出土土器 第9図に1~3トレンチの上層から出土した土器を示す。13は、古式土師器の高坏である。13は、坏部と脚部に粘土を継いで成形している。脚部外面は、ヨコミガキ、坏部付近ではケズリ後にタテミガキ調整がされる。坏部はケズリとヨコナデによって調整がされる。14~16は、古式土師器の甕であり、14・15は、受口状口縁、16は、くの字状口縁である。14は、口縁部をヨコナデ、肩部は内外面ともケズリ後ユビオサエで調整し、外面にはハケ調整もみられる。15は、外面を全体にヨコナデ後ハケナデで調整する。口縁部には、ハケによる条線が2本確認できる。16は、口縁部が外面をヨコナデ、内面をヨコハケで調整される。胴部は、外面をハケ、内面を指抑え、ケズリ、強いナデによって調整され、外面には全体にススの付着が確認できる。



第 8 図 SD01 遺物出土状況図(上層・下層)



第9圖 SD01 上層・下層出土土器

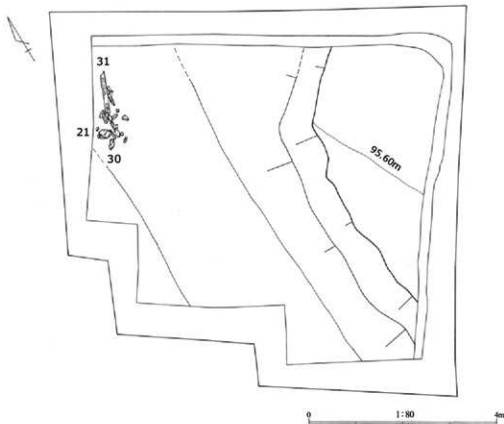


第10図 SD01 下層出土木製品

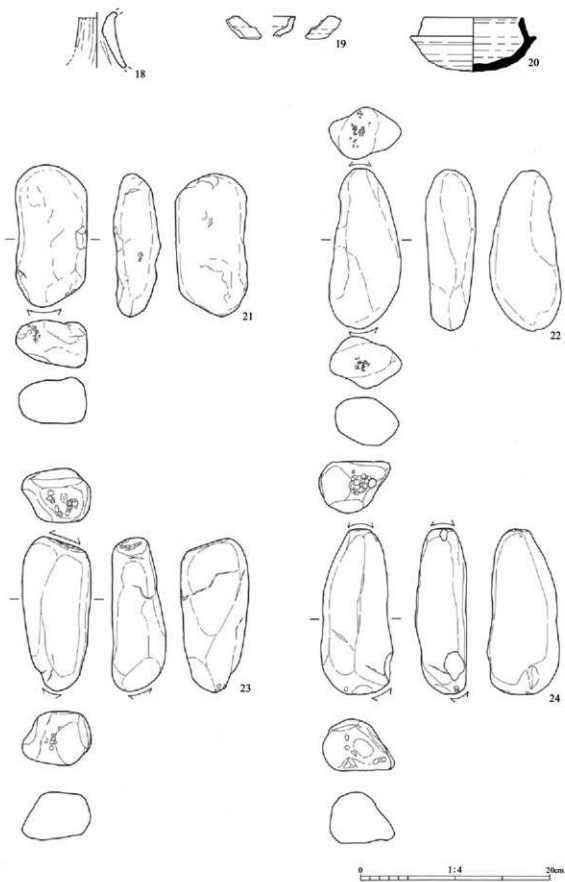
下層出土木製品 第10図に2トレンチの下層から出土した木器を示す。17は、SD01の下層から出土した板材で、大溝の底から出土した。残存長158.2cm、幅5.4cm、厚さ2.1cmを測る。幅と厚さは、全体でほとんど変化はなく、丁寧に成形されている。建築部材として使用された可能性が考えられる。

窪地出土土器 第12図に3トレンチの窪地の堆積層から出土した土器を示す。18は、古式土師器の高坏で、脚部のみ残存する。外面はタテミガキによって調整され、赤彩塗布が確認できる。19は、古式土師器で、受口状口縁の甕である。全体がヨコナデによって調整される。20は、古墳時代中期以降の須恵器の坏身である。底部は回転ケズリで、他内外面ともに回転ナデによって調整される。全体に自然釉の付着が確認できる。

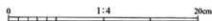
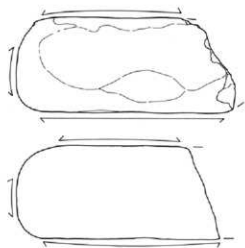
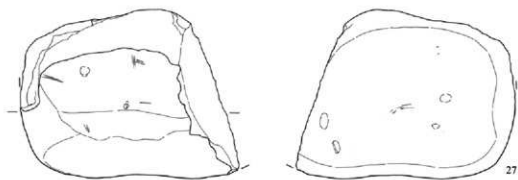
窪地出土石器 第12～13図に3トレンチの窪地から出土した石器を示す。石器は、調査区の北西隅にまとめて出土した。21～26は、敲石である。26は、砥石としての使用もみられる。21～23・25は湖東流紋岩類、24・26は硬質砂岩を使用している。21は片面のみ、22～26は上下2面に敲打痕が確認できるため、両面で使用されていたことがわかる。27～30は、台石である。27～29は湖東流紋岩類、30は硬質砂岩を使用している。27～30のすべてにおいて、上下2面に使用の痕跡が残る。30は、被熱痕とみられる黒く変色した部分が確認できる。



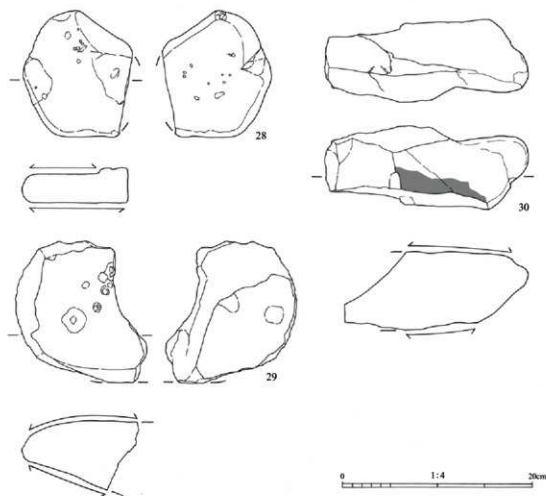
第11図 遺物出土状況図(窪地)



第12図 窪地出土土器・石器



第13図 窪地出土石器(1)



第14図 窪地出土石器(2)

窪地出土木製品 第15図に3トレンチの窪地から出土した木製品を示す。31は、調査区の北東端で出土しており、石器と一緒に出土したため、同時期に廃棄されたものと考えられる。残存長91.8cm、幅8.6cm、最大厚さ5.1cmを測る。上部端近くに、長さ6.4cm、幅4.8cmの長方形のほぞ穴が確認できる。また、中央部にも長さ6.4cm、幅3.2cmのほぞ穴が確認できる。上部のほぞ穴が、中央にあけているのに対して、中央のほぞ穴は右寄りにあけられている。下部には、約3.5cm、厚さ1.6cmの段が2つ確認できる。下部は欠損しているため、これ以降に段が存在していたかは定かではないが、2つの段と同じ間隔の位置には確認できない。階段状のようにもみえるが、段の厚さが1.6cmと薄く、幅も狭いため、用途は不明であるが、建築部材として使用した可能性が考えられる。



第15図 窪地出土木製品

(3) 小 結

ほぼ調査区全体を占めるSD01大溝は上層と下層に大別でき、さらに埋没後の窪地に堆積した層が認められる。土器の出土量は少ないが、口縁部から底部まで残存するものが2点出土している。下層から上層にかけて出土した土器は、庄内式期から布留式期初頭にかけての土器である。土層堆積状況や庄内式期以前の土器が出土していないことから、庄内式期には機能し始め、布留式期初頭以降には埋没している可能性が高い。また、1トレンチよりも3トレンチの標高が僅かに低いことや、1・2トレンチで確認されていた下層が、3トレンチでは確認できないため、大溝は南から北へわずかに傾斜して掘られていたと考えられる。窪地の堆積層から出土した土器には、古墳時代中期以降の須恵器も確認されている。遺物の年代幅が広く、受口状口縁甕と高坏、石器は混ざり込んだ可能性が考えられる。古墳時代中期以降の遺物が出土していることから、古墳時代前期には自然堆積によって大溝としての機能が失われ、窪地状となった後、古墳時代中期頃にその窪地に土器、石器、木器が廃棄されたか、埋積したものと考えられる。

第3章 総括

1. 主な調査成果 大溝SD01について

(1) はじめに

SD01大溝は機能時としては、上層と下層の2層に大別できるが、埋没後にできた窪地に堆積したとみられる層を含めると3層に大別することができる。SD01出土土器の編年の位置を明らかにし、その上でSD01大溝の時期や性格について考えてみたい。

(2) 出土土器の時期

出土土器は、下層12点、上層4点、窪地3点の19点を数える。その中で、庄内式期後半の受口状口縁甕（2・3・4・5・6・14・15）がほとんどである。高坏（13）においても、庄内式期である。頸部より上の口縁部が、少し狭いことや、一方向のハケのち横方向にハケを行っていることから、東海の伊勢湾にみられるS字甕の影響を受けているものもみられる（5）。2方向にクロスするようにハケ調整がされている受口状口縁（6・14・15）は、在地でみられる特徴である。胸部外面でケズリ調整が行われている受口状口縁の甕（3）は、比較的新しい、布留式期初頭に下る可能性もある。下層の口縁部が直線的に外反する小型丸底鉢（1）、受口状口縁の屈曲がやや甘くなっている甕（9）、口縁部先端が内側に肥厚する甕（10）は、布留式期のものである。窪地からは、古墳時代中期以降の須恵器の坏身（20）が、出土している。

上層、下層ともに庄内式期のものが最も多いが、下層からは布留式期初頭のものも確認できる。また、器種においては、甕が最も多い。甕の中には、在地の特徴である2方向のハケをもつものがみられるのに対して、在地土器ではあるものの、東海の伊勢湾にみられるS字甕の影響を受けた甕も出土しており、東海地方とのつながりもうかがえる。受口状口縁甕は、Ⅱ段階c～dを主体に、Ⅲ段階a（戸塚2018）も少しみられる。以上から、これらの土器は、およそ中居編年のⅢ-2期からⅣ-1・2期に併行する時期と考えられる（中居2010）。

(3) 大溝の時期

下層からは、庄内式期後半から布留式期にかけての土器が出土しているため、掘削時期は、庄内式期以降の可能性もある。上層からは庄内式期の土器が出土しているが、2層のみでしか確認できないため、下層との混ざりの可能性も考えられる。少なくとも、庄内式期から布留式期初頭までは、大溝として機能していたと考えられる。しかし、上層の堆積状況は、厚い粘土層であり、2a、2b層は腐植物が多く含まれているため、上層堆積時には湿潤な環境であり、周りの植物を取り込みながら堆積していったと考えられる。埋没時期は、布留式期と考えられる。埋没後に形成された窪地の堆積層からは、古墳時代中期以降の須恵器の坏身が確認できる。そのため、窪地は古墳時代中期には形成されていたものと考えられる。

以上のことから、SD01大溝は庄内式期以降に掘削され、布留式初頭までは機能していたものと考えられる。また、布留式期には埋没しており、古墳時代中期には窪地が形成されていたと考えられる。SD01大溝より下層には、庄内式期以前に形成されていた自然流路に関わるとみられる堆積層が確認でき、この層からは遺物が出土していない。また、隣地である第39次調査では、同時期とみられる小穴や土坑が確認できる。土坑には、焼土と炭化物が含まれており、大溝の近くで何らかの生産活動が行われていた可能性が考えられる。今後の周辺調査によって、集落北端部での活動が明らかになっていくことが期待される。

2 稲部遺跡群北大溝について

(1) はじめに

37次調査区では、庄内式期に機能し、布留式期初頭以降に埋没したと考えられる南北方向の大溝が部分的に検出された。また、周辺の既往の調査では、37次調査区から南西に約60m離れた14次調査区において弥生時代後期後半～布留式期初頭の南北方向の大溝が検出されている。両地点で確認されたそれぞれの大溝の特徴について整理し（第3表、第16図、第17図）、これらの時期と層相について考えることで、調査のまとめとしたい。

(2) 14次・37次調査の大溝

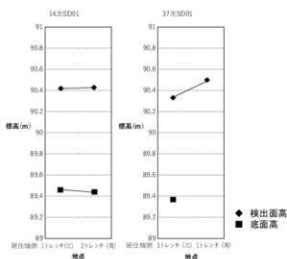
14次調査SD01 14次調査SD01は、溝幅が10.0m以上と推定され、底面の標高値は89.44～89.46m、深さ約1.0mを測る。下層、上層ともに粘土を主体とし、ブロック土を含むとともに、砂が混じる。堆積層は粘土が主であり、溝内では水が滞留していた様子がみられる。掘り直しの痕跡も認められている。下層で弥生後期後半の土器が多く出土しており、溝の掘削時期もほぼこの時期であると考えられ、庄内式期、布留式期初頭にかけて機能した大溝と考えられる。上層からは青銅器鋳造と鍛冶の関連遺物が出土し、溝の近くに鍛冶炉の可能性のある炉跡を伴う平面積約15.0㎡の掘立柱建物位置し、鍛冶関連遺構とみられる。

37次調査SD01 37次調査SD01は、溝幅が推定約6.0mで、底面の標高値は89.38mである。深さ約1.0mを測る。下層は粘土が少し混じるシルトであるが、上層は腐植物を含む粘土であり、水の流れが滞ったために、植物系の堆積物が含まれていたとみられる。下層では庄内式期から布留式期の土器が出土し、これらの土器が示す時期に主に機能した大溝と考えられ、弥生時代後期末以前の土器は出土していない。

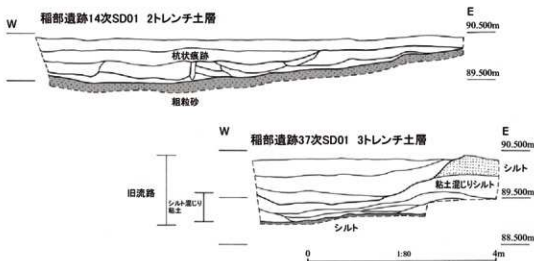
大溝の位置関係と機能時期 14次・37次調査で確認された大溝は、近い位置関係にあるが、これまでの調査で確認された弥生時代終末から古墳時代初頭の居住域との関係でみると、14次SD01がより居住域に近く、さらに外縁側に37次SD01が位置する。掘削時期は14次SD01が弥生時代後期後半に遡り、37次SD01は出土土器からみて庄内式期以降の大溝であると考えられるので、双方の溝で掘削時期に差があった可能性はある。しかし、ともに庄内式期から布留式

第3表 稲部遺跡14次SD01・37次SD01の規模・層位・時期比較

	14次SD01		37次SD01	
	1トレンチ(北)	2トレンチ(南)	3トレンチ(北)	1トレンチ(南)
横幅(m)	10.0以上(推定約13.0前後)		4.3以上(推定約6.0)	
検出面高(m)	90.41	90.416	90.32	90.5
底面高(m)	89.86	89.44	89.36	89.6以下
溝の深さ(m)	1.01	1.016	0.94	0.9以上
層位層 上層	褐色粘土 灰砂の混じり 質(砂、石粒)	灰色～赤色粘土 灰色粘土プロット～5%含む	灰色粘土 礫砂～2%含む 田化跡～1cm以下に含む	灰色粘土 礫砂物～2%含む 田化跡～1cm以下に含む
層位層 下層	緑褐色粘土 褐色粘土 砂混じり 田化跡～1cm以下に含む	灰色～緑灰色～褐色灰色粘土 灰色粘土プロット～3%含む 礫砂物～細粒砂混じり 田化跡～1cm以下に含む 田化跡線	灰色粘土 礫砂物～2%含む 田化跡～1cm以下に含む	灰色～緑褐色シルト 粘土中に散在 田化跡～5cm以下に含む
掘削時期	弥生後期後半		庄内式期以降の可能性	
埋没時期	弥生後期後半～庄内式期～布留式期初期		庄内式期～布留式期初期	
埋没時期	布留式期		布留式期初期以降	
出土土器	F層・弥生後期後半(6%), 庄内式期(20%), 布留式期初期(9%) 土層・弥生後期後半(2%), 庄内式期(20%), 布留式期初期(39%)		F層で庄内式期～布留式期初期の土器が出土	
備考	近付城脚の溝、大溝東に縦立柱礎物と竃治石が位置する。竃治御遺物(伊材・金具等)、青銅器跡遺物(高杯形土製品・鉄器土製品)、磁石・白石・粘土が出土。		14次SD01(第1北大溝)の北側の溝、遺物を含まない旧道路層積層を断ち切って埋没。埋没後に形成された古墳時代中期頃の窪地の堆積層中で遺物の可能性がゆる磁石・鉄器類をみつちが出土。	



第16図 稲部遺跡14次SD01・37次SD01の検出面高・底面高



第17図 稲部遺跡14次SD01・37次SD01土層断面図



第18図 稲部遺跡群における庄内式期から布留式期初頭の北大溝の位置

期初頭の土器は出土しているので、この時期については、複数の大溝が機能していたと考えてもよいだろう。埋没した時期も双方で大きな差はないとみられる。溝の方位は、14次SD01が真北から西へ約15度、37次SD01が真北から西へ約5度の角度であり、比較的近い方位である。また、集落本体により近い14次SD01と比べて、より外縁部に位置する37次SD01の方が検出面と溝底面の標高値がわずかに低く、緩やかに北へ低くなる。

(3) 大溝に関する課題

居住域との関係でみると、14次調査SD01、37次調査SD01の大溝は、それぞれ集落の北東縁端部で計画的に開削された大溝と見ることができるのではないだろうか。大溝周辺で金属器生産関連遺構・遺物が確認されたことから、拠点的な集落が形成されるなかで、排水施設、物資運搬用水路として、また手工業生産との関係性のなかで整備された集落北方の大溝と考えられる。現時点では、両方の大溝を「北大溝」とし、居住域に近い方から14次SD01を第1北大溝、37次SD01を第2北大溝として把握できる可能性を指摘しておく（第18図）。ただし、前者は単独地点での確認にとどまり、後者は一連の溝である可能性が考えられる13次、19次、27次調査等の大溝との比較検討が必要である（1）。今後の調査で大溝に関する情報がより充実すれば、稲部遺跡群の弥生時代終末から古墳時代初頭の集落に関する理解が深まると期待される。

註

- 1) これらの北大溝と居住域を挟んで南に位置する令和4年度に実施した稲部遺跡34次調査では、出土土器等から庄内式期から布留式期初頭には機能していたと考えられる残存幅10.0m以上、深さ1.2mの大溝SD07が確認されている。この溝の南ではこれまでの試掘調査等によって谷部が確認されており、周辺の調査状況をふまえると、34次調査SD07は、稲部遺跡における弥生時代終末から古墳時代初頭の集落の南縁端部に位置する可能性が考えられる。この大溝については「南大溝」とし、集落の範囲と構造を考えるうえで欠かせない調査成果であると考えられる。

参考文献

- 川村峻太 2023「稲部遺跡34次調査―集落南端部の大溝―」『第118回滋賀県埋蔵文化財センター研究会
和4年度滋賀県発掘調査成果報告会 資料集』 滋賀県埋蔵文化財センター
- 戸塚洋輔 2018「出土土器の編年的検討と大溝の時期」『稲部遺跡第14次発掘調査報告書』彦根市埋蔵
文化財調査報告書第72集
- 中居和志 2010「古墳出現前後の近江地域―土器編年を中心に―」『立命館大学考古学論集V』立命館
大学考古学論集刊行会
- 伴野幸一 2006「近江地域―野洲川流域を中心に―」『古式土器の年代学』（財）大阪府文化財セン
ター
- 彦根市教育委員会 2016『稲部遺跡第3次・稲部西遺跡第2次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報
告第66集
- 彦根市教育委員会 2018『稲部遺跡第14次発掘調査報告書』彦根市埋蔵文化財調査報告第72集

第4表 出土遺物観察表

番号	遺物・部位	種類	副産	保存率 (%)	気乾 率 (%)	器高 高さ (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	重量 (g)	色調	その他	
1	S001 下層	古式土師器	鉢	破以下						IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
2	S001 下層	古式土師器	壺	破	20.0	22.0	15.4	8.4		IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面、土付面
3	S001 下層	古式土師器	壺	破	20.0	18.0	13.4	4.0		IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面、土付面
4	S001 下層	古式土師器	壺	破	20.0	17.0	13.0			IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
5	S001 下層	古式土師器	壺	破	20.0	14.0				IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
6	S001 下層	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
7	S001 下層	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
8	S001 下層	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色、土付面
9	S001 下層	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
10	S001 下層	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
11	S001 下層	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
12	S001 下層	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
13	S001 上層	古式土師器	壺	破	20.0	11.0	6.0			IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
14	S001 上層	古式土師器	壺	破	20.0	5.0	15.4			IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
15	S001 上層	古式土師器	壺	破以下	破	5.0	14.0			IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
16	S001 上層	古式土師器	壺	破	20.0	22.4	15.4	20.0		IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
17	S001 下層	土師器	壺	破		0.4	100.0					破損面以下
18	S001 遺物	古式土師器	壺	破	20.0					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
19	S001 遺物	古式土師器	壺	破以下	破					IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
20	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	5.0	10.4			IPW-101(古銅色)	IPW-101(古銅色)	古銅色表面
21	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	7.0	15.0			600.0 灰白色	600.0 灰白色	破損面以下
22	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	7.0	10.0			600.0 灰白色	600.0 灰白色	破損面以下
23	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	7.0	10.0			600.0 灰白色	600.0 灰白色	破損面以下
24	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	7.0	10.0			600.0 灰白色	600.0 灰白色	破損面以下
25	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	6.0	13.0			600.0 灰白色	600.0 灰白色	破損面以下
26	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	7.0	15.0			600.0 灰白色	600.0 灰白色	破損面以下
27	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	10.0	17.0			5,000.0 灰白色	5,000.0 灰白色	破損面以下
28	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	11.0	13.0			700.0 灰白色	700.0 灰白色	破損面以下
29	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	11.0	13.0			2,000.0 灰白色	2,000.0 灰白色	破損面以下
30	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	11.0	13.0			2,000.0 灰白色	2,000.0 灰白色	破損面以下
31	S001 遺物	土師器	壺	破	20.0	11.0	13.0			2,000.0 灰白色	2,000.0 灰白色	破損面以下

色調は標準土色紙(「森林水産省森林水産技術会議事務局監修」)に準拠した。

反は記載してないものを示す。

奈良時代前期から後期までの土師器(弥生土師器、古式土師器)および布目式土師器の土師器土師器(古式土師器)と、古墳時代中期以降の土師器土師器(土師器)と。



1 調査区全景(南から)



2 調査区全景(北から)

図版2



1 SD01 3トレンチ土層断面(南壁)



2 SD01 3トレンチ土層断面(南壁)



1 SD01 1トレンチ土層断面(北壁)



2 SD01 1トレンチ全景

図版4



1 SD01 土器出土状況(1トレンチ下層)



2 SD01 土器出土状況(1トレンチ上層)



1 SD01 木製品出土状況(2トレンチ下層)



2 SD01 遺物出土状況(3トレンチ窪地堆積層)

图版6



1 SD01 下層出土木製品



2 SD01 下層出土木製品(部分写真)



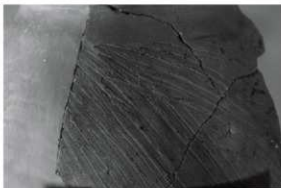
3 SD01 窪地堆積層出土木製品



4 SD01 窪地堆積層出土木製品(部分写真)



1 SD01 出土土器



2 SD01 出土土器(部分写真)

图版8



SD01 出土土器



1 SD01 下層出土土器



2 SD01 窪地堆積層 出土石器(敲き石)

图版10



1 SD01 窪地堆積層 出土石器



2 SD01 窪地堆積層 出土石器(部分写真)

報 告 書 抄 録

ふりがな	いなべいせきだいさんじゅうななじはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	稲部遺跡第37次発掘調査報告書							
副書名	分譲住宅建設工事に伴う発掘調査							
シリーズ名	彦根市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	94							
編著者名	川村峻太(編)、戸塚洋輔							
編集機関	彦根市観光文化戦略部 文化財課							
所在地	〒522-8501 彦根市元町4番2号 TEL 0749-26-5833							
発行年月日	20240329							
ふりがな	ふりがな	コード		世界測地系		調査面積	調査期間	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
いなべいせき 稲部遺跡	ひこねし 彦根市 いなべいせき 稲部町	252026	202-147	35度 12分 20秒	136度 11分 47秒	55.48㎡	20221122 ～ 20221222	分譲住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
稲部遺跡	集落	弥生時代後期 から古墳時代 前期	大溝	土師器 須恵器 木製品 石器		愛知川流域の弥生時代後期から古墳時代前期の大規模拠点集落の縁端部において、大溝を検出した。		
要約	稲部遺跡群は、旧愛知川の一つである文祿川流域に位置する弥生時代終末から古墳時代初頭(紀元2～3世紀)を中心とする大規模集落で、本調査地点は、弥生・古墳時代の集落域の北東縁端部にあたる。弥生時代終末から古墳時代初頭の大溝を検出した。また、大溝から当該期の土器が出土した。							

彦根市埋蔵文化財調査報告書第94集

稲部遺跡第37次発掘調査報告書

一分譲住宅建設工事に伴う発掘調査一

令和6年（2024年）3月29日発行

編集・発行：彦根市観光文化戦略部文化財課
滋賀県彦根市元町4番2号
TEL 0749-26-5833

印刷・製本：有限会社田中印刷所
彦根市小泉町1042番地1

INABE SITE

2024